

出題分析		
試験時間 2科目で150分	配点 60点	大問数 4題
分量（昨年比較）〔減少 同程度 増加〕	難易度変化（昨年比較）〔易化 同程度 難化 〕	
<p>【概評】</p> <p>論述しやすい問題とやや解答のポイントをつかみにくい問題が混在しているのは例年通りであった。出題内容は古代・中世・近世・近代史の4問構成で、出題ジャンルは政治・社会・文化史であった。また出題形式では、第1～3問が通常の資料文形式であった一方、第4問は2022年度より3年連続で出題されたグラフが見られず、引用史料と資料文を合わせた形式であった。</p> <p>基本的知識をベースに分析力・論理展開力が求められていることは変わらないが、一部でややまとめにくい問題も見られたことから、全体的に標準的な問題が並んだ昨年度と比べれば、今年度は難化したと言えるだろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	古代における中国文化の受容	7世紀から8世紀における中国文化受容のあり方や担い手の変化に関して論述する問題。資料文では当該時期の文化導入の事例が挙げられているものの、解答にそのまま引き写すだけでは「受容のあり方」の変化を示すには不十分であるため、情報を抽象化して説明を付加する必要がある。資料文を横断した考察が必要で、解答をまとめるのにはやや工夫を要するだろう。	やや難
2	室町時代の土一揆	室町時代の土一揆について、その構成や基盤の違いについて論じる出題。それぞれの土一揆の構成や基盤と問われると多少戸惑うかもしれないが、(1)(2)の「沙汰人」と(3)(4)の「地侍」に注目するとよい。惣村の住民であるという両者の共通項目に着目し、「地侍」が守護の家来であったという違いをしっかりと解答に落とし込みたい。	標準

設問別講評			
3	幕藩体制の成立	A では徳川家康の東海道整備の特徴が問われた。設問に「関ヶ原の戦いの後」とあることから、大坂の豊臣秀頼や西国の有力大名を意識した軍事的な性格を持っていたことに触れたい。B では関ヶ原の戦い直後と大坂夏の陣以降の参勤の違いについて、大名の視点から述べるのが求められた。家康の頃には資料文に「わずかな供を連れて」とあることから、将軍と大名個人との主従関係を示すものであったことが読み取れる。一方、その後は参勤が制度化され、幕府と藩との関係に変化したことを論じたい。	標準
4	明治期の唱歌	A では学制の教科のうち「唱歌」が当面実施されないこととされていた理由が問われた。掲げられている史料から、当時の日本には西洋人に認められるような音楽は存在しなかったことに気づきたい。B では1884年頃の『小学唱歌集』から1911～14年刊行の『尋常小学唱歌』への内容変化の背景が問われた。この間の教育行政の性格の変化を想起しつつ、(5)の「日本人によって」という部分などに着目すべきだろう。	標準

合格のための学習法

東京大学の日本史は、最難関大学ということで何か特別な知識・訓練などが必要と思うかもしれないが、実際は他の大学と同じく、教科書の記述に即して解答を作成できるものも多い。とはいえ、資料文を利用しつつ、教科書の知識をどのように設問の要求に対応させるかで力の差が出てくるので、その点での難しさはあるだろう。まずは東大の過去問を利用して解答として要求されている学力のあり方を把握し、政治・外交・経済・文化などすべての分野に目配りして教科書の理解を深めていきたい。その後は、問題演習を進めて限られた時間で答案を作成する練習を重ねていきたい。